京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2019-3

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇一九-三

平安京左京一条四坊十五町跡・公家町遺跡

平安京左京一条四坊十五町跡・公家町遺跡

2019年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京一条四坊十五町跡・公家町遺跡

2019年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、南池護岸改修工事に伴う平安京跡・公家町遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

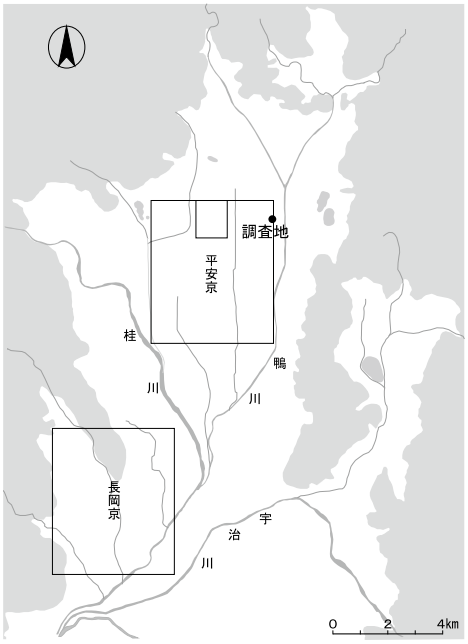
令和元年12月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	平安京跡・公家町遺跡　（京都市番号　19Ｈ249）
2	調査所在地	京都市上京区京都御苑　仙洞御所内
3	調査委託者	株式会社　環境事業計画研究所　代表取締役　所長　吉村龍二
4	報告書委託者	分任支出負担行為担当官　宮内庁京都事務所長　詫間直樹
5	調 査 期 間	2019年７月29日～2019年８月２日
6	調 査 面 積	６㎡
7	調査担当者	近藤章子
8	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「御所」を参考にし、作成した。
9	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
10	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
11	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
12	遺 物 番 号	通し番号を付した。
13	本 書 作 成	近藤章子
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 3
（１）環境と立地 …… 3
（２）既往の調査 …… 4
３．遺　　構 …… 8
（１）基本層序 …… 8
（２）１区 …… 8
（３）２区 …… 8
（４）追加調査 …… 9
４．遺　　物 …… 11
（１）遺物の概要 …… 11
（２）瓦類 …… 11
５．ま と め …… 13

図　版　目　次

図版１　遺構　１　調査地全景（東から）
２　１区全景（南東から）
図版２　遺構　１　２区全景（南西から）
２　２区護岸全景（北西から）
３　追加調査（南東から）

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）　……　1
図２　調査区配置図（１：300）　……　2
図３　１区調査前全景（東から）　……　2
図４　２区調査前全景（北から）　……　2
図５　作業風景１（南東から）　……　2
図６　作業風景２（東から）　……　2
図７　周辺調査位置図（１：2,500）　……　5
図８　１区遺構実測図（１：30）　……　9
図９　２区遺構実測図（１：30）　……　10
図10　出土瓦類拓影及び実測図（１：４）　……　12
図11　寛永度の庭園図と現在の庭園図　……　13

表　目　次

表１　周辺調査一覧表　……　6
表２　遺構概要表　……　8
表３　遺物概要表　……　11
表４　仙洞御所年表　……　14

平安京左京一条四坊十五町跡・公家町遺跡

１．調査経過

調査地である仙洞御所は、現在の京都御苑内の東部に位置しており、平安京左京一条四坊の東半にあたる。調査地は十四町と十五町の間、近衛大路と東京極大路、また、公家町遺跡の南東部に位置する。調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）の指導の下、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当した。

仙洞御所は、寛永４年（1627）に後水尾上皇のために造営されたもので、その後、江戸時代を通して歴代上皇の御所として用いられた。東部には北池と南池の２つの池を中心にした庭園があり、今回は南池護岸改修工事に伴う発掘調査である。

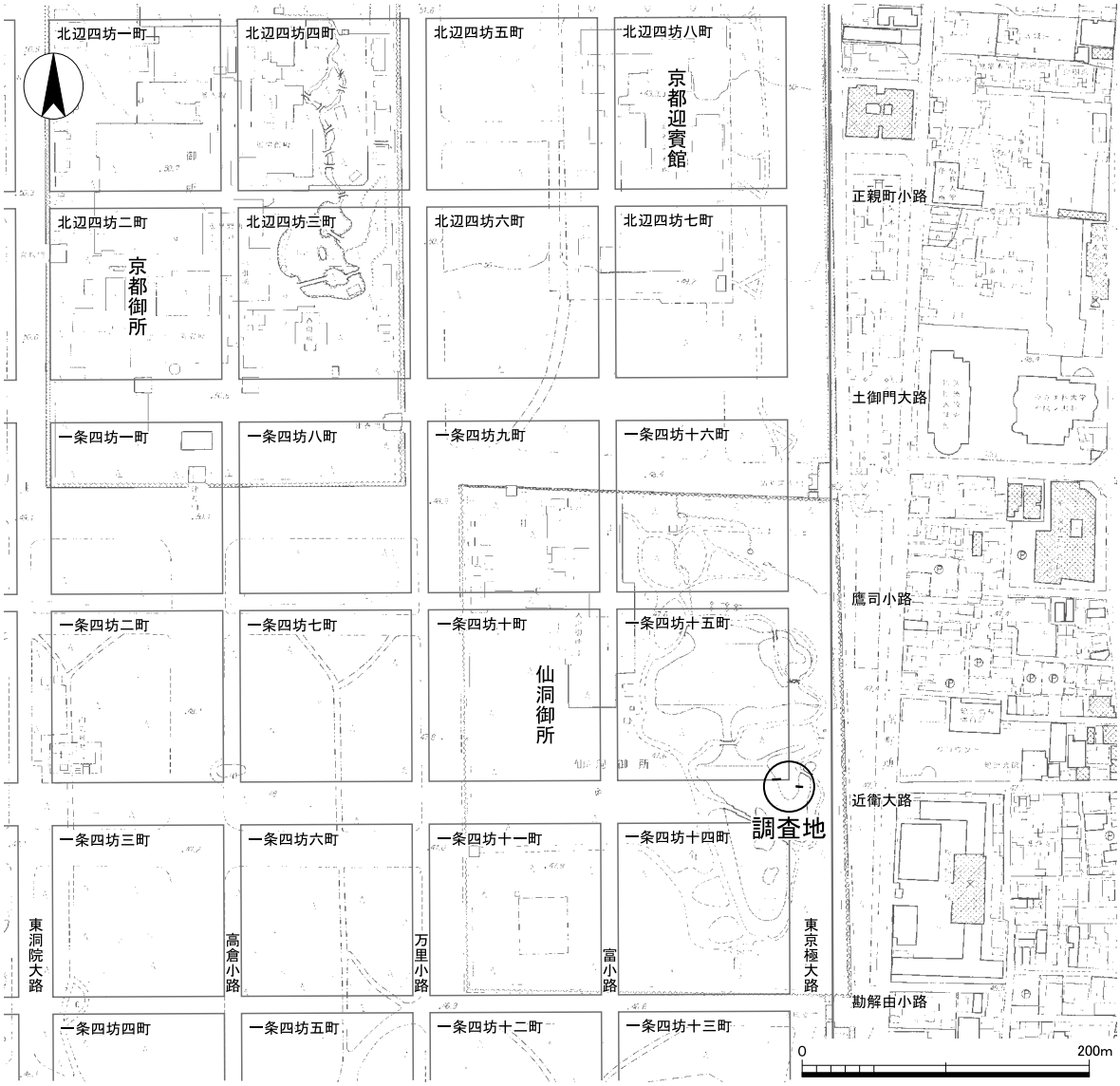


図１　調査位置図（１：5,000）

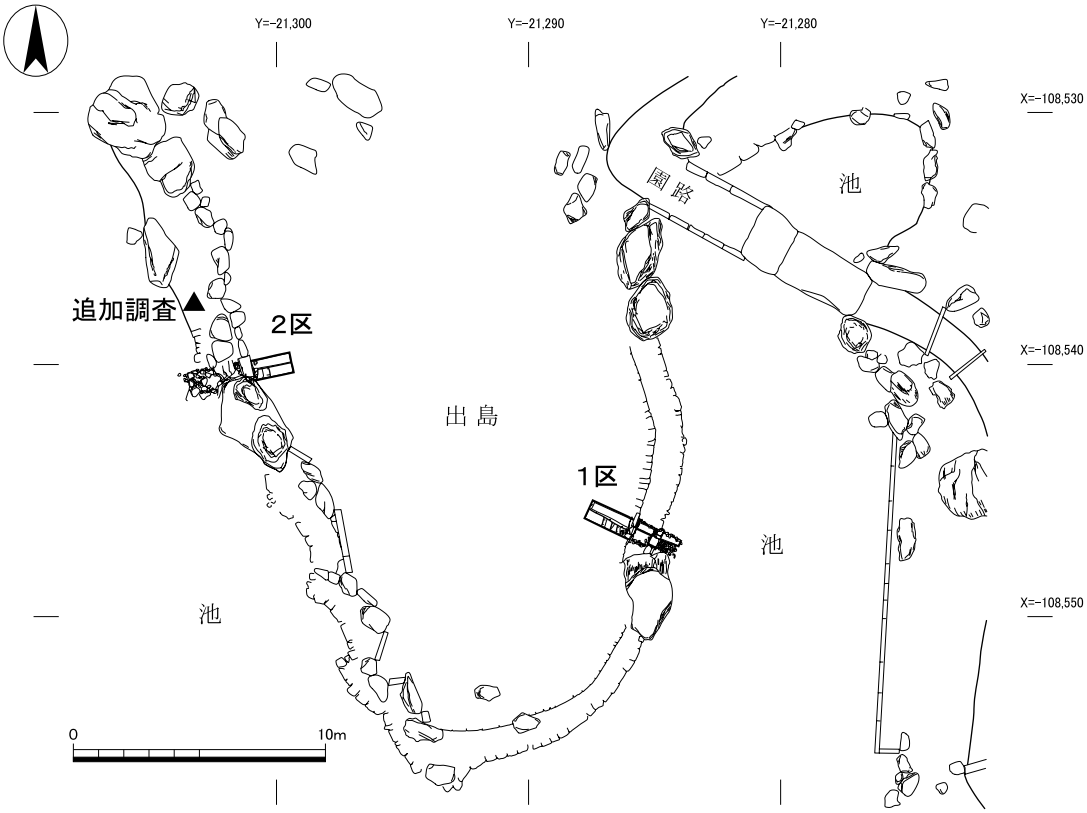


図２　調査区配置図（１：300）

図３　１区調査前全景（東から）

図４　２区調査前全景（北から）

図５　作業風景１（南東から）

図６　作業風景２（東から）

調査は2019年７月29日に開始した。調査区は、庭園内の南池にある出島と呼ばれる場所の東岸と西岸、自然石と花崗岩の切り石による護岸が特徴的な２箇所に設定した。調査はすべて人力で掘削を行い、排土は土嚢袋に詰めて原状回復できるように仮置きした。写真撮影・図面作成などの記録作業は、調査の進捗に合わせて適宜行った。すべての調査終了後に埋め戻しを行い、８月２日に機材・物品の整理・搬出をして、現場作業を終了した。

調査中には、適時、文化財保護課の臨検を受けた。また、８月１日には、検証委員の尼﨑博正氏の臨検を受け、合わせて宮内庁職員へ調査成果についての説明を行った。尼﨑委員の指示により、２区北側の花崗岩切石の石列が複数確認される箇所について、追加調査を実施した。

２．位置と環境

（１）環境と立地

調査地である仙洞御所は、現在の京都御苑内の東部に位置し、京都御所の南東側にあたる。京都御苑は、北は今出川通、南は丸太町通、西は烏丸通、東は寺町通に面し、その規模は南北約1,300ｍ、東西約700ｍ、面積は約92万㎡である。京都御苑は周囲を築地塀や石塁で区画され、苑内には京都御所、仙洞御所、大宮御所、京都迎賓館などが配され、宮内庁・環境省・皇宮警察関連の施設などがある。その他の区域は、昭和24年（1949）から国民公園として人々の憩いの場として親しまれている。仙洞御所の範囲は南北約350ｍ、東西約270ｍで、築地塀により区画される。

京都御苑を地理的にみると、京都盆地の北東寄りに位置し、高野川と賀茂川が合流する地点から南西約１㎞付近にあたる。付近一帯は砂礫層からなる地質で、高野川と賀茂川によって形成された複合扇状地である。地形は北東から南西方向へ下がるが、仙洞御所の南半部では、標高47.5～48.5ｍの等高線が舌状に張り出し、緩やかな高まりが見られる。これは洪水による土砂堆積などの自然要因のみで形成されたものではなく、数度に渡る建物焼失・再建、庭園整備に際して、整地された結果、地形の高まりが形成されたものと見られる[1)]。

歴史的に見ると、平安京から公家町形成以前と仙洞御所を含む公家町遺跡に大きく分けられる。現在の仙洞御所は平安京の北東付近、条坊では左京一条四坊九～十一町、十四～十六町にあたり、調査地は平安京東端である東京極大路と東西道路の近衛大路交差点付近にあたる。平安時代中期には九町は藤原道長の妻、源倫子の邸宅とされる「鷹司殿」があった。十四町は平安時代末期には左中弁藤原重方の邸宅があった。十五・十六町は藤原道長の邸宅の土御門殿（京極殿）で、後一条天皇、後朱雀天皇、後冷泉天皇の里内裏としても使用されている。土御門殿の旧地は現在の仙洞御所の北半部にほぼ該当している。鎌倉時代には、藤原邦綱の邸宅の後身・土御門東洞院殿を中心とした公家・武家の邸宅地となる。室町時代には、土御門東洞院殿に光厳天皇が北朝方の内裏を移し、以後、内裏として固定した。これが現在の京都御所のもととなる。室町時代後期には荒廃するが、安土桃山時代に織田信長が御所の修理・整備を行っている。天正13年（1585）に関白に就任

した豊臣秀吉は、信長の前例に従い御所の修理を行い、御所周辺に公家を集住させ、公家町を形成した。この政策は徳川幕府にも継承され、大規模な火災などを契機に宅地割や道路幅を変えながらも、明治２年（1869）の東京遷都まで存続していく[2)]。

仙洞御所の場所は、慶長末から元和元年（1615）頃に描かれた「中むかし公家町之図」によると、『高台院殿』と『九条家隠居』『九条』に相当する[3)]。この地は秀吉が慶長２年（1597）に建てたとされる京都新城の推定地にあたり、秀吉の妻・高台院が居住していた。仙洞御所はその屋敷地を利用し、寛永４年（1627）に譲位し上皇となった後水尾上皇のために造営されたものである。北には東福門院の女院御所が配される。造営には、作事奉行として小堀遠江守政一（小堀遠州）があたった。東部には広い池を中心に庭園があり、京都新城の庭園を引き継いだと考えられている。作庭は、寛永11年（1634）、建物の造営と同じく小堀遠州により行われている。当初の庭園は、女院御所と仙洞御所との間に塀があり、２つの庭園に区画され、池も独立したものであった[4)]。

仙洞御所は、万治４年（1661）、寛文13年（1673）、延宝４年（1676）、貞享元年（1684）、宝永５年（1708）、天明８年（1788）、嘉永７年（1854）などの火災により焼失と造営を繰り返しているが、嘉永７年の焼失後は仙洞御所は再建されていない。一方、女院御所は慶応３年（1867）に英照皇太后のために造営された。これが現在の大宮御所である[5)]。

（２）既往の調査（図７、表１）

仙洞御所内の調査　掘削深度の制限のある発掘調査や工事に伴う立会調査が多いため、遺構の時期や性格を把握しがたいものが多いが、女院御所や仙洞御所に関する遺構が検出されている。敷地北西部の調査14は女院御所の跡地である。調査による掘削深度に制限があったが、宝永の大火（1708年）以降の建物跡を検出している。また、断割調査により東西方向の塀基礎を検出し、これは調査15でその延長を確認している。基礎は花崗岩切石を使用し、被熱しているが、火災時期の特定には至っていない。寛永期の造営に伴う塀と考えられている。敷地西部の調査４－４では、女院御所と仙洞御所の境界築地とそれに伴う東西溝を検出している。築地基礎は栗石を詰めた土坑で、溝は側石の間の目地を漆喰で固め、底部は漆喰のみで仕上げている[6)]。敷地南東部の調査４－５では、宝永・寛政期の建物群の一つである御文庫の雨落ち溝と考えられる南北溝を検出している。敷地北部の調査８－８では、現存の築地塀基礎の下から石組を検出しているが、時期の特定はできなかった。池周辺では池護岸工事に伴う立会調査を行っている。北池の南西部の調査５－２と東部の調査５－３では平安時代から鎌倉時代と江戸時代の包含層を検出している。北池西部の調査５－４では、東西方向の石組溝を検出している。

仙洞御所周辺の調査　北築地北側の調査１では江戸時代の南北方向の築地状遺構、同じく北築地の調査６－２では石組溝を検出している。調査12では江戸時代前期の築地を検出し、鷹司邸の北東角と推定されている。調査６－１では池状遺構と景石を検出し、平安時代の土御門殿の園池と推定されている。土御門殿の推定地は仙洞御所の北半部にあたる。

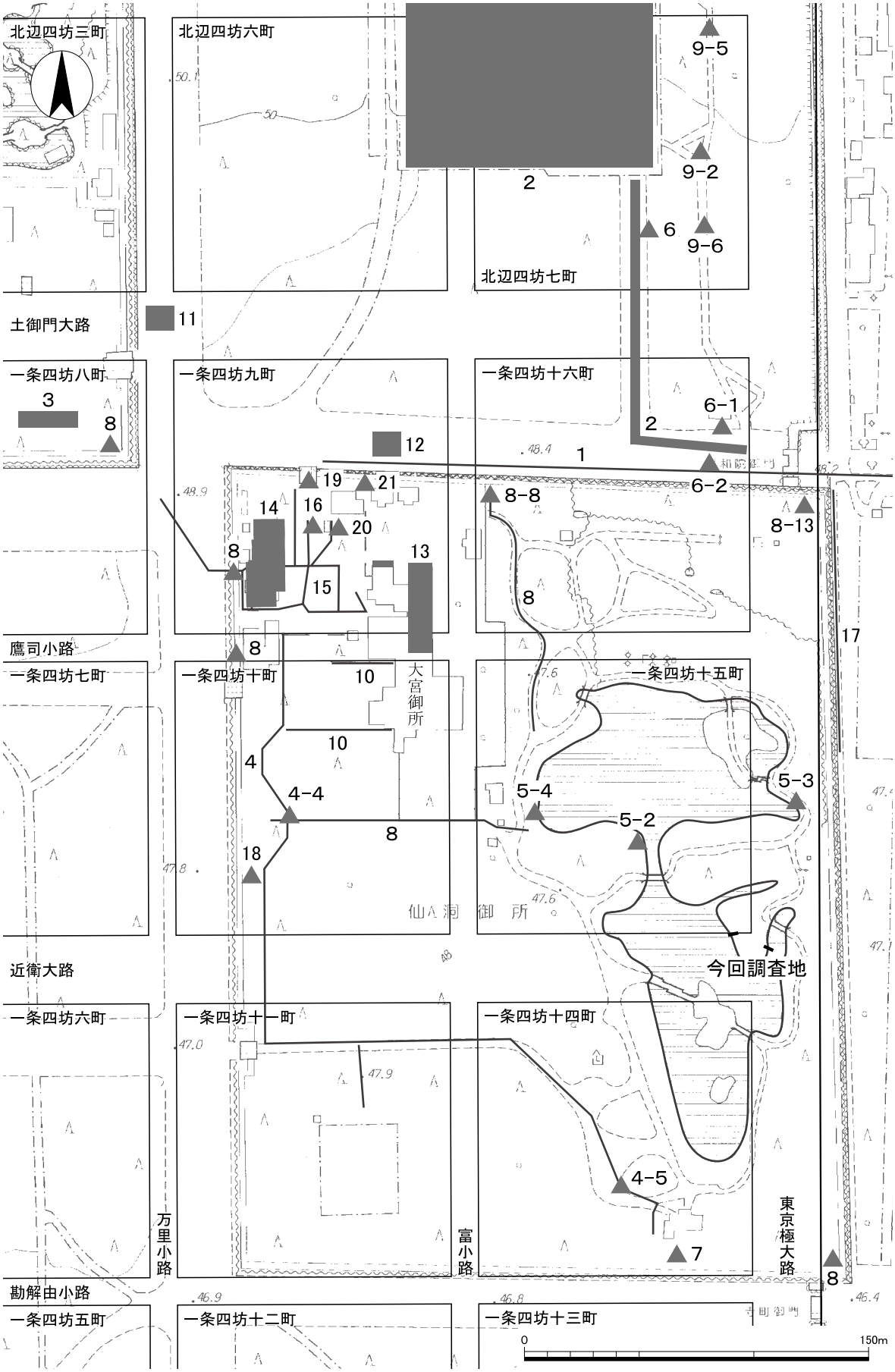


図７　周辺調査位置図（１：2,500）

表１　周辺調査一覧表

番号	条坊	調査方法	調査期間	調査概要	備考	文献番号
1	一条三・四坊、二条三・四坊	立会	1983/10/01～12/16	平安時代(10世紀後半)の遺物包含層、近世の南北方向の築地状遺構・土坑。	83HK-G-010-16	1
2	北辺四坊五～八町、一条四坊十六町跡	発掘	1997/05/19～2001/11/30	飛鳥時代以前の流路、平安時代の園池・道路、鎌倉時代の地業・道路、室町時代の堀、桃山時代から江戸時代の公家町の成立と変遷をたどる遺構群を検出。		2
3	一条四坊八町跡	発掘	1999/03/01～03/26	寛政期造営の築地を検出。		3
4	一条四坊九～十一・十四町跡	立会	1999/07/15～08/24	№４：江戸時代の境界築地とそれに付随する東西溝を検出。 №５：宝永・寛政期造営の御文庫の雨落ち溝を検出。	99HL125	4
5	一条四坊十四・十五町跡	立会	2000/01/25～03/07	№２・３：地表下－0.3mで近世の包含層、－0.5mで平安時代から鎌倉時代の遺物包含層を検出。 №４：東西方向の石組溝を検出。	99HL370	5
6	北辺四坊七町、一条四坊十六町跡	立会	2000/10/31～11/13	№１：地表下－0.8mで平安時代の池状堆積・景石を検出。土御門殿の庭園遺構の可能性がある。地中保存した。 №２：平安時代後期の包含層を検出。－0.7mで江戸時代の東西方向の石組溝を検出。	00HL228	6
7	一条四坊十四町跡	立会	2001/01/16	地表下－0.35mまで現代盛土。	00HL300	7
8	一条四坊十・十五・十六町跡	立会	2001/03/06～04/10	№８：江戸時代前期の流れ堆積、江戸時代中期・末期の焼土層を検出。№13：現存の築地塀基礎下から石組を検出。	00HL362	7
9	北辺四坊七・八町跡	立会	2001/05/25～06/01	№５：地表下－0.38mで江戸時代の水抜施設の石組土坑を検出。№６：－1.05mで室町時代前期の包含層、－1.6mで鎌倉時代の包含層を検出。	01HL054	7
10	一条四坊十町跡	立会	2001/09/17～09/25	地表下－0.2mで焼土を含む整地層を検出。	01HL196	7
11	一条四坊九町跡	発掘	2001/09/17～10/24	江戸時代中頃の礎石建物、江戸時代後半の道路を検出。		8
12	一条四坊九町跡	発掘	2002/07/22～09/04	江戸時代前期の鷹司邸の築地や土蔵を検出。		8
13	一条四坊九町跡	発掘	2006/01/06～01/23	江戸時代後半の土坑を検出。		9
14	一条四坊九町跡	発掘	2015/09/07～12/08	大宮御所(女院御所)跡地。宝永の大火(1708年)後から慶応三年(1867年)の建物跡、宝永の大火後に撤去された塀の基礎を検出。		10
15	一条四坊九町跡	立会	2015/07/23～2016/01/28	調査14の延長と思われる東西方向の築地基底部を検出。推定宝永火災前の女院御所北築地。	14HL067	11
16	一条四坊九町跡、公家町遺跡	立会	2017/01/23～11/17	地表下－0.21mでオリーブ褐色泥砂、－0.28mで鈍い黄褐色泥砂(時期不明包含層)、－0.41mで灰黄褐色粗砂(時期不明洪水層)、－0.47mで灰黄褐色微砂、－0.55mで赤褐色炭混泥砂(時期不明焼土層)、－0.66～0.7mで灰黄褐色泥砂。	16H154	12
17	北辺三坊八町・一条四坊十六町跡、公家町遺跡	立会	2017/02/21	地表下－0.31mで鈍い黄褐色泥砂(近世包含層)、－0.54mで褐色泥砂(時期不明包含層)、－0.63～0.7mで暗褐色泥砂(時期不明包含層)。	16H631	12
18	一条四坊十町跡、公家町遺跡	試掘	2017/11/26	地表下－0.2m以下、公家町遺跡に関する遺構面を複数確認。	17H330	13
19	一条四坊九町跡、公家町遺跡	立会	2017/12/06	地表下－0.22mで大宮御所北築地基礎石を検出。－0.1～1.67mで青灰色粘質土(時期不明包含層)。	17H081	12
20	一条四坊九町跡	立会	2018/01/29	地表下－0.7まで盛土。	16H154	14
21	一条四坊九町跡	立会	2018/03/12～03/13	地表下－0.75mまで盛土。	17H774	14

註

1） 河角龍典『平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷』考古学と自然科学　第42号　日本文化財科学会誌　2000年

『平安京左京一条四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

2） 『京都市の地名』日本歴史地名大系　第27巻　平凡社　1979年

3） 財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』 角川書店　1994年

4） 森　蘊・村岡　正『仙洞御所庭園の研究』 造園雑誌23巻　社団法人日本造園学会　1959年

5） 註４に同じ

6） 文献４（表１　周辺調査一覧表）の本文Ｐ６では、安政期造営以後としているが、仙洞御所は嘉永７年（1854）に焼失後、再建されていないため、寛政期の間違いと思われる。

文献（表１　周辺調査一覧表）

1 百瀬正恒「平安京左京一条三・四坊、二条三・四坊」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

2 平方幸雄ほか『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2004年

3 長戸満男「平安京左京一条四坊」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2000年

4 吉本健吾ほか「平安京左京北辺四坊二町、一条三坊十六町、四坊一・九・十・十一・十四町（98HL348・375、99HL125）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成11年度』 京都市文化市民局　2000年

5 「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報　平成12年度』 京都市文化市民局　2001年

6 内田好昭ほか「平安京左京北辺四坊七町、一条四坊十六町（00HL228）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成12年度』 京都市文化市民局　2001年

7 「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報　平成13年度』 京都市文化市民局　2002年

8 上田栄治ほか『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002－８　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2002年

9 木下保明『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005－14　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2006年

10 持田　透『平安京左京一条四坊九町跡・公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015－13　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2016年

11 奥井智子「平安京左京一条四坊九町跡・公家町遺跡（14H067）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成28年度』京都市文化市民局　2017年

12 「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成29年度』 京都市文化市民局　2018年

13 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成29年度』 京都市文化市民局　2018年

14 「調査一覧」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成30年度』 京都市文化市民局　2019年

３．遺　　構

（１）基本層序（図８・９）

層序は上から現代盛土（芝盛土）、にぶい黄褐色細砂の整地土（２層）、灰黄褐色細砂・黄灰色シルト・褐灰色細砂などの出島構築土（図８の５～８層、図９の６～８層）、黄灰色粗砂の庭園の基盤層（９層）となる。

調査区は出島の東部（１区）、西部（２区）の２箇所に設定した。１区の標高は、西端が46.07ｍ、上段護岸石が45.65ｍ、下段護岸石が45.14ｍ、２区の標高は、東端が45.96ｍ、上段護岸石が45.77ｍ、下段護岸石が45.00ｍ、池の水位には変動があるが、調査前の水位は45.65ｍである。

（２）１区（図版１、図８）

調査区は幅0.8ｍで、池部に延長1.85ｍ、陸部に延長2.0ｍ設定した。池の護岸は花崗岩による上下二段構造となり、上段と下段の間は幅約0.8ｍのテラス状の平坦面となる。上段の護岸は花崗岩の切り石を２～４石積み、下段は花崗岩の割石とその前面をおさえる松杭で護岸する。テラス状平坦面から池底にかけては、拳大の石を敷き詰めている。上段護岸背面において、幅0.5ｍ、深さ0.35ｍの範囲で、ベントナイト遮水シートを含む現代層を検出した。これは平成12年度の護岸改修に伴うもので、その工事の際に護岸石の積み直しや汀の松杭の打ち直しなどが行われたと報告されている。しかし、今回の調査で、護岸石の最下段は基盤層上面に据えられていることを確認し、据えられてから手が加わっていないことが判明した。また、現状において、護岸上段の石組にも緩みやハラミは確認できなかった。

陸部では、池底から続く基盤層上面に出島構築土が確認された。確認した構築土は４層（５～８層）、土を盛り上げながら最上層をにぶい黄褐色細砂層（２層）で整地している。また、この構築土を切り込む、平成12年度改修工事以前の旧護岸の裏込め（４層）を検出した。埋土には、江戸時代の瓦や礫を多数含む。

（３）２区（図版２、図９）

調査区は幅0.8ｍで、池部に延長2.2ｍ、陸部に延長1.6ｍ設定した。２区では１区と同様の護岸構造と陸部の状況を確認した。

上段護岸の池側には、大型の花崗岩（長辺0.9ｍ・短辺0.75ｍ・厚さ0.65ｍ）が据えられる。花

表２　遺構概要表

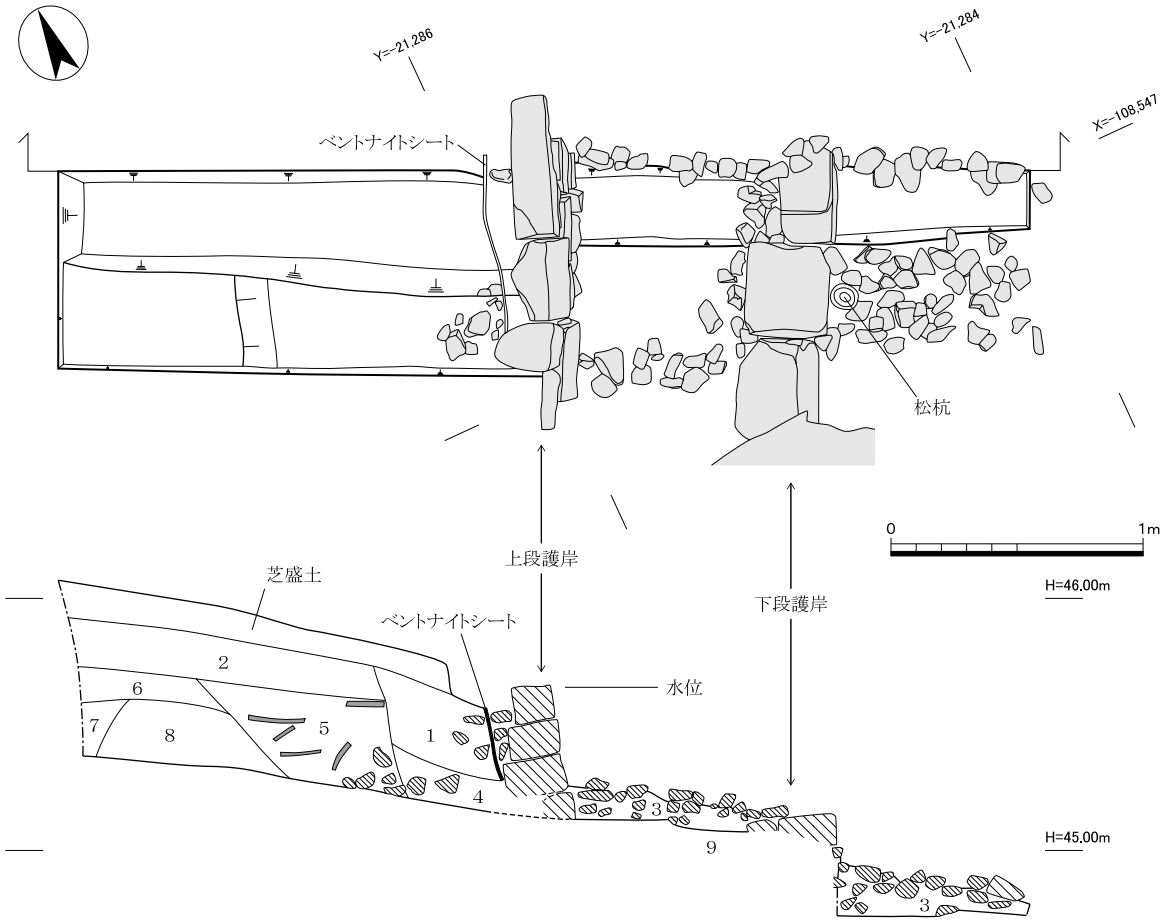
時　　代	遺　　構	備　　考
江戸時代	出島構築土	

崗岩の天端は平坦で、同規模の景石がそれ以外に護岸に沿って２石並べられている。護岸と景石との間には、拳大の礫が詰められる。

陸側は、基盤層（９層）の上に出島構築土（６～８層）が盛られ、上を整地土（２層）で整地されている。

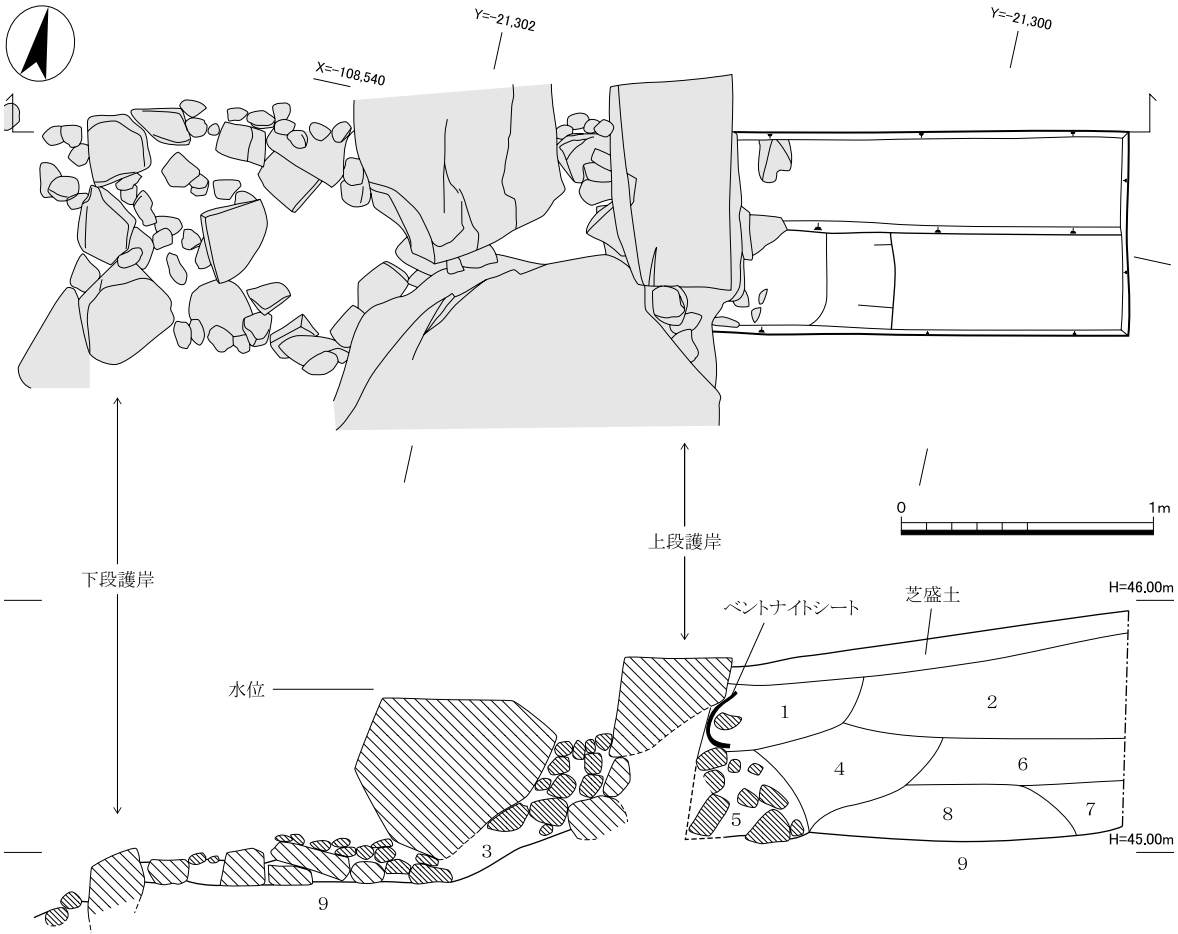
（４）追加調査（図版２）

追加調査（２区北側）花崗岩切石の石列周辺の拳大の礫を除去し観察を行ったが、２区のテラス状の平坦面と同様に基盤層上面に礫が敷き詰められた状態であった。目視した以外の石列などはみられないことから、これらの石列は平坦面に敷かれた拳大礫の流出を防ぐためのものと考えられる。写真記録のみ行った。



1 10YR4/1 褐灰色細砂～粗砂 φ1～5cmの礫中量 近世瓦含む(平成12年修理)
2 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 φ1～2cmの礫中量 近世瓦・焼瓦・土器含む(整地土)
3 7.5Y3/1 オリーブ黒色粗砂
4 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 φ5～10cmの礫多量含む(旧護岸石裏込)
5 10YR4/2 灰黄褐色細砂～粗砂 φ5～10cmの礫多量 近世瓦多量含む
6 10YR5/2 灰黄褐色細砂 φ1～3cmの礫中量含む
7 2.5Y4/1 黄灰色シルト φ1～3cmの礫少量 近世瓦多量含む
8 10YR4/1 褐灰色細砂＋ 2.5Y6/6 明黄褐色細砂
（出島構築土）
9 2.5Y4/1 黄灰色粗砂 φ1～5cmの礫多量含む(基盤層)

図８　１区遺構実測図（１：30）



1 10YR4/1 褐灰色細砂～粗砂 φ1～5cmの礫中量 近世瓦含む(平成12年修理)
2 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 φ1～2cmの礫中量 近世瓦・焼瓦・土器含む(整地土)
3 7.5T3/1 オリーブ黒色粗砂
4 10YR4/2 灰黄褐色細砂～粗砂 φ5cmの礫中量 近世瓦多量含む
5 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 φ5～10cmの礫多量含む(旧護岸石裏込)
6 10YR5/2 灰黄褐色細砂 φ1～3cmの礫中量含む
7 2.5Y4/1 黄灰色細砂 φ2～3cmの礫少量含む (出島構築土)
8 10YR4/1 褐灰色細砂＋ 2.5Y6/6 明黄褐色細砂
9 2.5Y4/1 黄灰色粗砂 φ1～5cmの礫多量含む(基盤層)

図９　２区遺構実測図（１：30）

４．遺　　物

（１）遺物の概要

遺物は整理コンテナにして５箱出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類がある。瓦類が大半で、土器・陶磁器類はごく少量である。

中世の遺物は、土師器皿・焼締陶器などがある。出島構築土から近世の遺物とともに出土したため、混入品と考えられる。いずれも小片である。

江戸時代の遺物は、染付・陶磁器・瓦類があり、瓦は熨斗瓦、菊丸瓦が含まれる。土器類は小片で実測できないため、今回は瓦類のみを掲載した。出土した瓦類は軒丸瓦・丸瓦・平瓦・菊丸瓦・熨斗瓦がある。熨斗瓦は平瓦との区別が難しいが、焼成前に施した沈線に沿って長方形に半裁されているものを熨斗瓦とした。

（２）瓦類

１～４は菊丸瓦である。小型円形の瓦当上面に細長い体部を接合する。１は単弁十六葉花文で、弁端は丸みをもつ。周縁あり。瓦当径は7.9㎝。瓦当裏面、外面はナデ調整。２は単弁八葉花文、周縁あり。瓦当裏面はナデ調整。１・２は瓦当面にキラコが付着する。３・４は菊丸瓦の差し部、３は断面形はカマボコ型、最大幅4.5㎝、厚さ1.7㎝。外面はナデ調整、４は最大幅2.8㎝、厚さ1.9㎝、外面はケズリのちナデ調整、裏面は未調整。外面にキラコが付着する。

５・６は軒丸瓦、瓦当は巴文である。５は右巻きの三巴文で、周囲には大粒の珠文を配する。瓦当裏面は粗いナデ調整、凸面はタテ方向のケズリ、凹面は当て具痕が明瞭に残る。６は周囲に大粒の珠文を配する。瓦当裏面はヨコナデ調整、瓦当面にキラコが付着する。

７～10はやや小型の丸瓦である。外面はすべてタテ方向のナデ調整、玉縁はヨコ方向のナデ調整を施す。７・８は凹面の布目圧痕を棒状工具で調整する。９は凹面に縄目と当て具痕が残る。10は外面はミガキ調整、凹面に19本単位の横方向の櫛描が２箇所なされる。

１～10はすべて出島構築土から出土した。18世紀後半から19世紀前半に属する。

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
室町時代	土師器、焼締陶器				
江戸時代	染付、施釉陶器、瓦類		軒丸瓦２点、菊丸瓦４点、丸瓦４点		
合　計		６箱	10点（１箱）		５箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より１箱多くなっている。

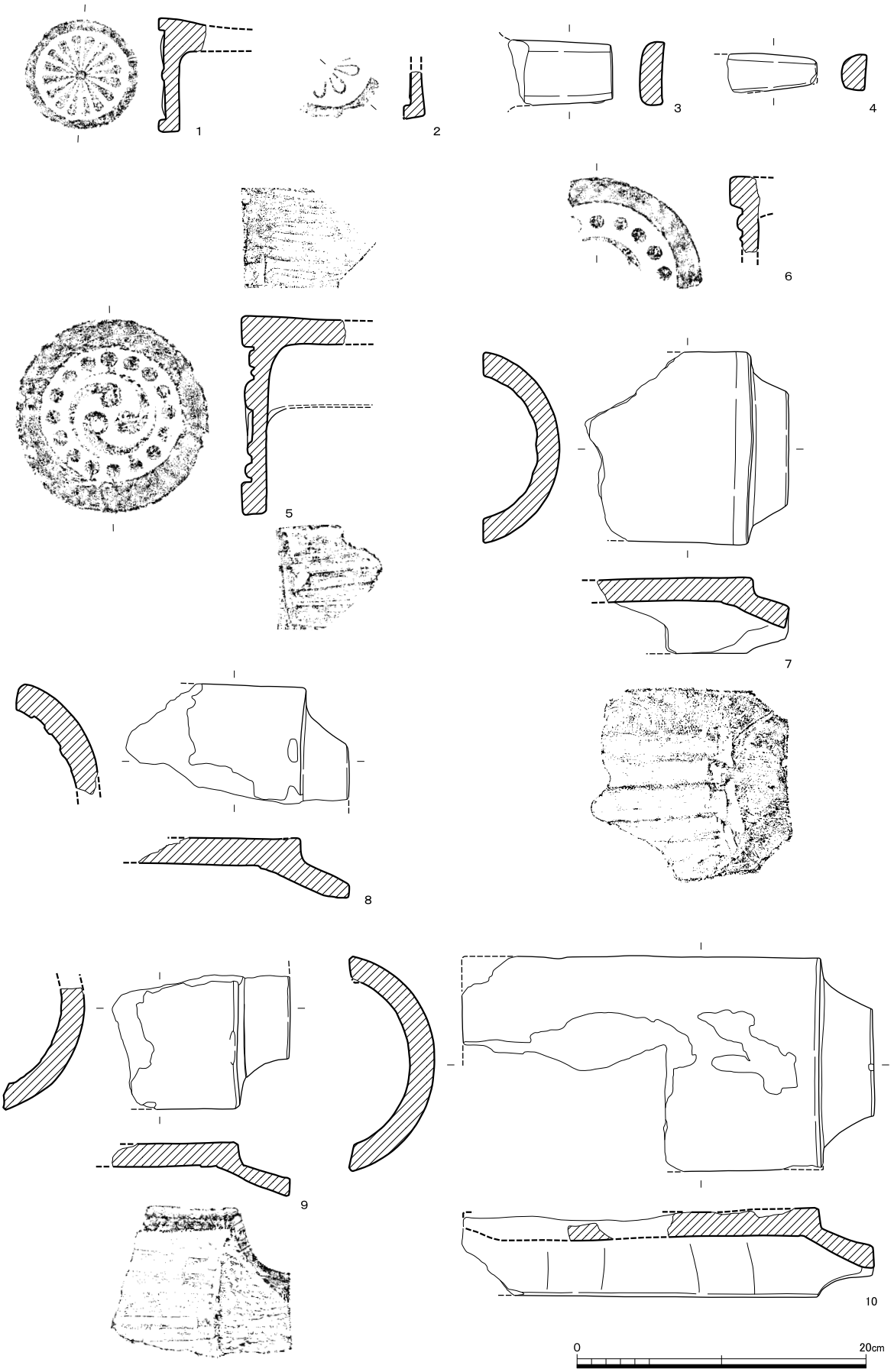
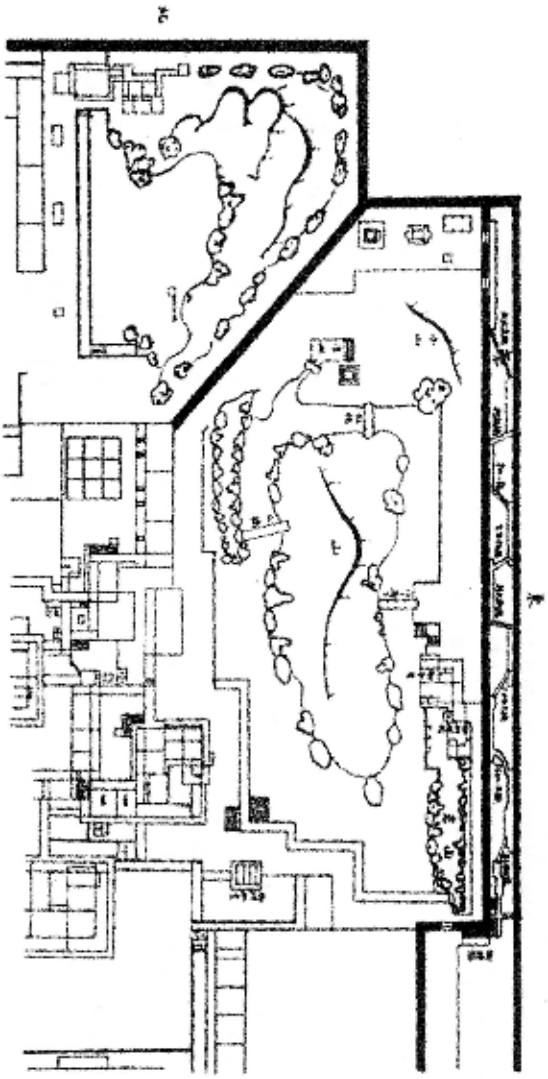


図10　出土瓦拓影及び実測図（1：4）

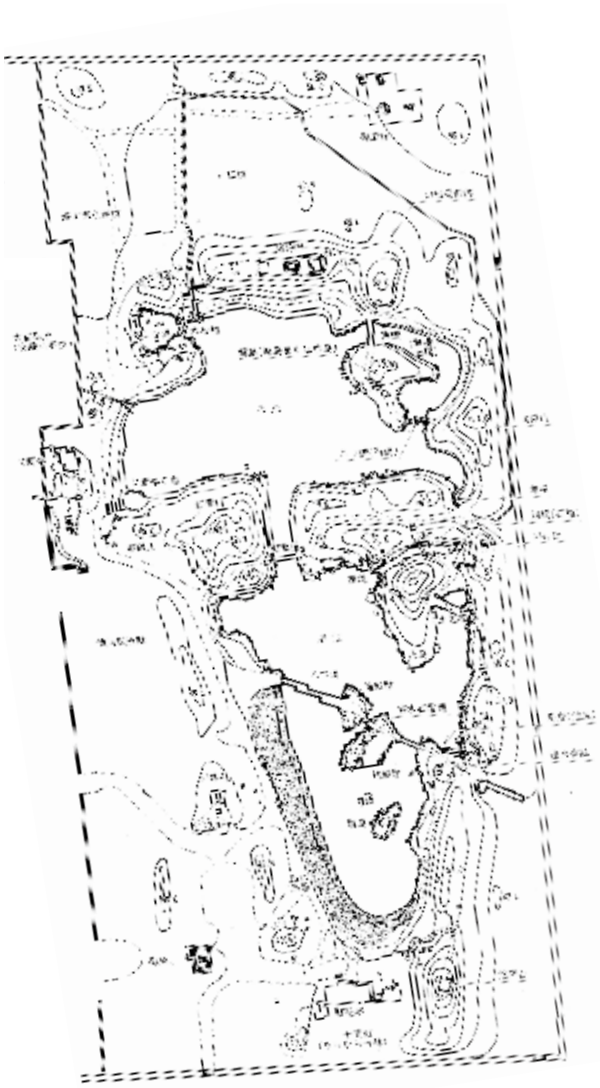
５．まとめ（図11、表４）

仙洞御所の歴史的経緯については前述したが、当初の庭園については「寛永度後水尾院御所並東福門院御所指図」によれば、女院御所と仙洞御所の２つの庭園に分かれており、池もそれぞれに存在した。その後の火災や再建などを表４としてまとめた[1)]。度重なる火災による院御所の焼失と再建により、それに伴って庭園も改変されていると考えられる。現在のように、北池と南池は繋がった状態となったのは、桜町上皇の延享４年（1747）であると考えられている[2)]。

調査の結果、出島の構築土からは江戸時代後半の瓦が多数出土したことから、現在の出島は江戸時代後半に構築されたものと考えられる。仙洞御所の歴史的変遷と照らし合わせると、天明の大火後、寛政２年の再建に伴う可能性が高い。また、上下２段の池の護岸のうち、上段護岸は平成12年に改修されているが、護岸石基底部は出島築造時のものであることが判明した。出島の護岸状況は、江戸時代後半から基本的には変化していないと考えられる。



「寛永度後水尾院御所並東福門院御所指図」庭園部分写



仙洞御所庭園地形実測図

図11　寛永度の庭園図と現在の庭園図
森　蘊・村岡　正『仙洞御所庭園の研究』造園雑誌23巻１号　1959年　より引用

表４　仙洞御所年表

元　号	西　暦	火事	居 住 者	備　　考
～慶長				高台院殿(北政所：豊臣秀吉の正室)
寛永７年	1630		後水尾上皇	①仙洞御所・女院御所(和子：徳川秀忠娘)
寛永11～13年	1634～1636			仙洞御所・女院御所庭、小堀遠州作庭
承応～万治	1652-55 ～1658-61			庭園改造：池を広げ、滝を落とし、島を増やし、橋を架ける
万治４年	1661	焼失		二条邸より出火、一条邸を仮御所
寛文３年	1663			②仙洞御所再建　庭園の改造・拡大
寛文13年	1673	焼失		③仙洞御所再建　造営に伴い庭園の改造
延宝４年	1676	焼失		御所内広御所より出火
延宝５年	1677			④仙洞御所再建　　御殿の面積縮小
延宝６年	1678			東福門院崩御
延宝８年	1680			後水尾法皇崩御
天和２年	1682		朝仁親王	女院御所建物を林丘寺、青連院へ移築 朝仁親王(霊元天皇皇子、後の東山天皇)の東宮御所となる
貞享元年	1684	焼失		
貞享２年	1685			⑤仙洞御所再建
貞享４年	1687		霊元上皇	女院御所の再建(御西院の院の御所より建物移築) 池の拡張、南池中島を２つにする
宝永５年	1708	焼失		
宝永６年	1709			⑥仙洞御所再建
正徳２年	1712			新上西門院崩御
享保20年	1735		中御門上皇	
元文２年	1737			中御門上皇崩御
延享３年	1746			修理
延享４年	1747		桜町上皇	
寛延３年	1750			桜町上皇崩御
明和５年	1768			修理　～明和７年
明和８年	1771		後桜町上皇	女帝
天明８年	1788	焼失		
寛政２年	1790			⑦仙洞御所再建　復古的な様式で再建 松平定信(惣奉行)、御内庭造作
文化10年	1813			後桜町上皇崩御
文化14年	1817		光格上皇	南池の洲浜が玉石に、小田原の「一升石」
天保11年	1840			光格上皇崩御、のち空屋敷となる
弘化３年	1846			新清和門院崩御
嘉永７年	1854	焼失		内親王御殿より出火
慶應３年	1867			大宮御所再建　仙洞御所の建物は再建せず
明治２年	1869		英照皇太后	大宮御所

註

１）　藤岡通夫「失われたものと残されたもの」『仙洞御所』毎日グラフ別冊　毎日新聞社　1985年

２）　森　蘊・村岡　正『仙洞御所庭園の研究』造園雑誌23巻　社団法人日本造園学会　1959年

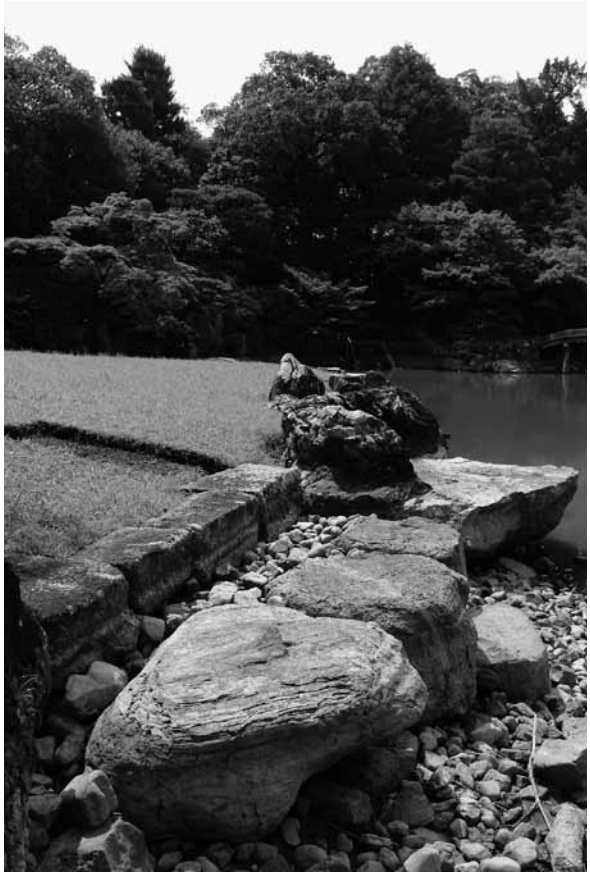
図　　版

1　調査地全景（東から）

2　１区全景（南東から）

図版２　遺構

１　２区全景（南西から）



２　２区護岸全景（北西から）

３　追加調査（南東から）

報　告　書　抄　録

ふ り が な	へいあんきょうさきょういちじょうしぼうじゅうごちょうあと・くげまちいせき
書　　名	平安京左京一条四坊十五町跡・公家町遺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０１９－３
編 著 者 名	近藤章子
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2019年12月20日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京跡（へいあんきょうあと） 公家町遺跡（くげまちいせき）	京都市上京区（きょうとしかみぎょうく） 京都御苑（きょうとぎょえん） 仙洞御所内（せんとうごしょない）	26100	1 241	35度 01分 17秒	135度 46分 00秒	2019年７月29日～2019年８月２日	６㎡	池護岸改修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡	都城跡	江戸時代	出島構築土	瓦類	庭園の基盤層を検出した。 出島が江戸時代後半に構築されたことが判明した。
公家町遺跡	邸宅跡				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2019-3

平安京左京一条四坊十五町跡・公家町遺跡

発行日　2019年12月20日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　℡ 075-256-0961